平川塾ニュースレターNo.2

2023年４月１日発行

〒558-0003　大阪市住吉区長居３－３－２５
メゾン住吉壱番館　１階－５
平川塾　06-6695-0181

Shiro-usagi

白兎・素兎

平川塾HP　アメブロ

文責：平川　達三

こんな国語の授業なら必要ないよね？

2023年02月02日(木)　アメーバブログ

Google先生で「住吉区（大阪市）　国語　塾」という検索ワードを入れてみると、自塾のＨＰってどの辺に出てくるのだろうかと調べてみましたら、ナンか、とんでもない文言にヒットしました。

「塾で国語を勉強しても意味あるの？」

その内容にいちいち触れると批判的になる部分もあるので、ざっくりと思ったことを書きますね。

国語を勉強しても意味がないと生徒さんに感じさせるような授業を提供しているんじゃないよね？　塾も塾ですが親御さんや生徒さんだって、国語という授業にどんな思惑を持たれているのかで、仮にせっかく優れた塾の国語授業も受け取り方がずいぶんと変わってくるだろうなと思ったのですね。

最悪のパターンはこんな感じですね。

「先生～、国語って大事ですよね～。
　全ての科目の土台ですものね～。」

とおっしゃってはいるものの、本音は別の所にある場合です。この際だから明言しますけれど、

「手っ取り早く　読み取りのスキルを教えてくれて、パパッと国語の成績を上げてくれればイイのよ。国語力が将来の宝物になるとか、いろんな本を読んだり素晴らしい言葉や文章に触れるなんていう精神論なんかどうでもイイわ。」

こういう親御様とお子様は、語弊を畏れずに申し上げますが、私の塾ではおそらく失敗なさると思います。それと、これも「あるある」なのですけれど、

「先生、塾の問題集よりも、この問題集を使ってくださいませんか？」

というメッセージと共にLineで写メを送りつけてくるパターン。正直なところを申し上げますが、少々カチンと来ます。

「こんなの見つけたのですが、どう思われますか？」

「こんな問題集があるのですが、これはどういう位置づけですか？　家庭学習用に使いたいのですが、どう思われますか？」

そういうお問い合わせであれば、こちらも勉強になりますので、リアル本屋さんに出かけて行き現物を拝見してきます。

昨今は、塾専用教材よりも市販の方が優れていることも往々にしてありますのでね。

それで、こちらがカチンと来る場合と勉強になるなと感謝する気持ちになる場合とでは、どこに違いがあるのでしょうか。

とても微妙な線引きですのでなかなか言語化できないのですけれど、確かにこの微妙なラインを越えてしまった場合には私の塾では必ず破綻を来します。

ずっと言い続けてきたことなのですが、再現性のないことはしないということです。

生徒さんが解いた国語の答案を生徒さんに答え合わせをさせる場合は、記号問題の箇所のみです。

書き抜きや文中の言葉を使って書く記述問題に関しては必ず私が点検します。

そして、ラインマーカーとか赤とか青のペンで、かなりな分量を書き入れられた状態で返却されます。

しかも、それを見といてねと言ってちゃんと見るほど子どもさんは甘くないということも重々承知です。

必ず口頭でも解説し、題材文章が指導者の目と通すとどのように見えているかを伝えます。事細かく書き込まれた内容と指導者からの解説や注意などをその指導者から直接提供され、その上で同じ問題を考えなおすということをしない限り、その子が帰宅した後でやりなおすときや、後日に塾舎でやりなおすときに再現されることはないと思っています。

というのは、この再現性こそが、文章を読む力とか読解問題を解くためのスキル養成などに直結するということがこちらの経験値で分かっているからです。

国語読解指導って、このくらい手間と労力がかかるのです。学校授業や塾での授業で黒板やホワイトボードに書かれたことをノートや問題集に書き写したとしても、それは単なる指導者からの注意書きだけであって、取り組んでいる題材文が指導者から見るとどのように見えているのかという、生徒さんが最も知りたいと思っている大切なところなんか見えて来はしません。

もっと分かりやすく言うと、

「この題材文を読んで、先生にはどうして分かるの？　とこでどう判断して正解を導き出しているの？」

ここが知りたいのに、肝心なところには触れられないで、通り一遍の解説なんかされたってナンの役にも立たない。

こんな負の方向を生徒さんに感じさせる国語の授業であれば、必要ないですね。

国語だけでなくて、指導形態が集団であろうが個別であろうが、指導者は勿論ですが、受ける側の生徒さんにも最低限のルールがありますよね。

指導されたことに対してしっかりと向き合うだけのやる気。それに対して、しっかりと向き合おうとしている生徒さんへ、その生徒さんの想いを受け止めてふさわしい指導をする指導者の取り組み方。

国語という授業は、これがなかなか成立しにくいという性質をもつ難しい科目でもあるのです。

「謎」が「謎」を呼ぶ

2023年01月28日(土) アメーバブログ

とにかく本を読まなかったのです。小学生のときから果ては40歳台まで、本なんて読まなくても生きていける、そう思っていました。

そんな私にも、一応の小さなターニングポイントのようなものはあるのです。

「小さな」とか「のような」と表現したのは、「本を読むこともまんざらではないんだな。」と、どこかで感じたとはいえ、それ以後、本を読むことを続けることはなかったという、まあ、いわゆる、気まぐれな「読後の感想」が残っただけだからです。

それは大学３年生の冬のことでした。

大学からの帰路の途中に、西日本最大級と言われている駅ナカの超大型書店の前を通ります。阪急梅田駅の紀伊國屋書店です。

本を読みませんのでね、普段は滅多に入らないのです。とはいうものの、全く読まないわけでもなくて、カール・セーガン著の『COSMOS・上下巻』は、なぜか気に入って自宅と大学を往復する電車の中で、ど文系だったワタシなので、ちょっと理系っぽい内容に半分ほど理解が及ばない状態ながら、それでも読んでいました。

というのも、『COSMOS』というカール・セーガン監修の番組がテレビで放送されていて、それをずっと見ていたこともあり、それにずいぶんと助けられたというのが読み続けられた理由だからです。

その後に出会ったのが『インカ帝国』という書籍です。天空の都市といわれているインカ帝国の遺跡であるマチュピチュの第一発見者になった、ハイラム・ビンガムの著書でした（現在は廃刊になっています）。

内容の半分は遺跡の様子や分析だったのですが、ストーリー性が強く、特にインカ帝国最後の皇帝だったアタァウルパ（アタワルパ）が、征服にやって来たスペイン提督に陥れられて処刑され、帝国がついに滅んでしまう様子が劇的に書かれていたのです。

「ふ～ん。そうやったんか～。」

という感動は強く残りましたし、断片的とはいえ、インカ帝国のことは勿論、この帝国があった周囲の地形の様子とかナスカの地上絵のこととかが、ワタシの新しい知識として脳裏に刻まれました。

この新しい知識が刻まれるという快感が、アステカ帝国の謎や巨石文明の謎に波及するという珍しい現象をワタシに起こしましたが、本を読む楽しさとか有用性とかを実感するというよりも、「謎」という言葉に惹かれた結果、その謎を知ったことで抱いた快感の方が強かったのですね。この「謎」という言葉には不思議な力があるというのか、このまま、モーツァルトの死にまつわる「謎」、チャイコフスキーの死にまつわる「謎」というように、やや違った意味での「謎」が「謎」を呼ぶ状態が続きました。

ただし、連続的ではなくて断続的だったのですが、むしろこの「謎」というキーワードが、現在の古代史ファンとるな潜在的なきっかけだったような気がします。

その後、塾を開いて数年後に歴史を教

えることの出来る学生スタッフが大学を卒業したことで退職し、それ以来、「歴史のスタッフ」が現れなかったため、私が教えることになりました。

高校生時代はあまり真剣に勉強していなかったので、アタフタしながら教えていましたが、そのときでしょうか、世の政治家や経営者は戦国武将のことをよく研究するそうだというのを、ある塾長先生から伺ったのです。

「先生、『竜馬がゆく』読んでみて。人生観が変わるよ。」

ナンでも、司馬遼太郎さんの名著『竜馬がゆく』を読んだら、高知県の桂浜に行き、当時の竜馬と同じように太平洋を向いて立ち、竜馬と自分を重ねたくなるという人が少なくないというのですね。

ワタシですか？

『竜馬がゆく』って文庫本で７巻ありますが、この巻数だけで、アカンやつです。今でこそ、大佛次郎（おさらぎじろう）の大著である『私本太平記』とか、ドナルド・キーンの名著『明治天皇』とかも読めますが、当時のワタシではこの７巻を読む気なんて到底起こりませんでした。

なので、小山ゆうさんの著『おーい竜馬』という漫画を読みました。正直なところ、坂本竜馬に関する小説とか漫画は、あまり好きになれないのです。坂本竜馬（当時の戸籍上の表記は坂本龍馬）さんに対する好き嫌いという感情的なことではなくて、暗殺という結末が決まっていて、ただそれに向かってひたすら進む薄暗い感覚がずっとまとわりついているのが怖いのです。

漫画であれ小説であれ、その著作を気に入って読むということは、少なくともそれを読んでいる間は著作者の思惑にどっぷりと浸かり、一時的にせよ洗脳され、読み手はその洗脳を許すということだと思っているところがあります。それは、ショスタコーヴィチ著の『ショスタコーヴィチの証言』で体験したからです。

スターリンの恐怖政治のもとで死後に発刊するという約束が交わされた後、どうやって厳しい監視の目を逃れたのかはまだ明らかにされてはいないのですが、彼の親友だったアメリカ人記者に手渡され、彼の原稿はその記者とともに無事にニューヨークへと逃れたのです。

その内容はというと、恐怖政治の中で彼自身がどのようにしてスターリンから虐げられたかが延々と綴られていて、

「スターリンの前では賢くならなくてよい。ただ卑怯であればよいのだ。」

などという恨み骨髄の言葉があらゆるところで現れるのですね。これを読んでいると、読み手の自分まで人を信用できなくなるような感情に絡み取られるのです。

この恐怖を感じることが出来る間はまだこの本に洗脳されていないということになるのでしょうが、時折思い出したように読んでも、毎回同じ恐怖を感じさせられるのです。

文字というのは恐ろしい。
文章というのは恐ろしい。
文字や文章には書き手の想いが棲む。

そう思わされる１冊なのです。

それで、『竜馬がゆく』は未だに読んでおらずで「本棚の肥やし」状態です。

では、『おーい竜馬』を読んでどうだったのかということなのですが、私の人生観を変えることは全く出来なかっただけではなくて、原作者である武田鉄矢さんの一方的な思い入れが無駄なほどに強く感じられただけで、感動すらしませんでした。それだったら『あやつられた龍馬』（加治将一著）の方が、ずっとおもしろいのです。なぜなら、「謎」を追いかけるからです。

その延長線上に出雲古代史の「謎」、古事記の「謎」などがあると思えば、そのきっかけは、私の場合は『額田王女』（井上靖著）にあると言えます。

というのは、この小説自体に「謎」はありませんが、この世を去ってからもう1000年以上になる人たちを、今なお現世で懸命に生きているような錯覚を抱かせるその作家の想像力と表現力は、一体どこから生まれるのだろうという大きな「謎」に魅了されたからです。

「謎」を追いかけるのっておもしろいですよね。「謎」は必ず「謎」を呼んできます。それを解決してゆくおもしろさは、勉強にも通じます。

こういうおもしろさに目覚めることを「病みつき」というのでしょうか。

尊敬の先を

2023年01月26日(木) アメーバブログ

池及めだかさん

「舞台稽古のときにな、客席からみんなの演技を見るんやけどな、『アイツ大したことないな～、全然オモロないやん。オレやったらもっと上手いことツッコムけどな～』と思うことがようあるねん。でな、実際に自分が舞台でやってみたらな、これが上手いこといけへんのやな。このとき分かったことがあるねん。大したことないなと思った相手は自分と同じレベルやねん。オレらは笑いのプロや。そのプロを『こいつオモロイな～』と唸らせるヤツはたとえ若手でもすごいレベルのヤツやねん。」

これは、吉本新喜劇の舞台役者である池及（いけの）めだかさんの言葉です。

時々生徒さんから、「先生が尊敬している人っているの？」と尋ねられることがあるので、私が学生の頃にもあったように、今でも学校から出されることがあるようですね。

この「尊敬する人」なのですが、家族以外で一般的な範囲での代表格としては、歴史の偉人、現役で活躍しているスポーツ選手、つい先日まで活躍していたスポーツ選手、あるいは有名アーティストなどなど･･･。

私はもとはピアノ弾きだったので音楽家が多いのですが、野球のことを全く知らないけれど、イチローさんは真っ先に挙げることができます。その他には、かなり時代を感じさせますが、王さんと長嶋さん。

私が小学生だった頃に大活躍なさっていたのが王さんと長嶋さんで、子どもの頃からスポーツには全く縁がなかった（縁を作ろうとも思わなかった）から周囲の男の子はたくさん選手を知っていてたけれど、私は王と長嶋のご両人しか知りませんでした。

こんな感じで、スポーツには無縁に近い私の脳裏にさえ、日本だけでなくて世界に通用する人物として、イマドキならイチローさんがサッと浮かびますから、ホンマにすごい人なのです。

そこで、例えば、小中学生さんにこのイチローさんをテーマにした作文をお願いするとします。イマドキのお子さんなので、まず Google 先生に尋ねて数多くヒットするであろう様々なサイトから調べ、それについて自分の思うことを上手に書くことでしょう。

その中で、おそらく、いちばん多い文章の結び方は、

「イチローは　本当にすごいと思います。」
「このような人になれたらいいなと思います。」
「このような人にあこがれます。」
あるいは、
「イチローのようなすごい人になれるように頑張りたいと思います。」
というような予測を立てることが出来ます。

ここからが今回のテーマです。

「尊敬」とか「憧れ」に端を発する感情として「～ようになりたいと思う」というように、「思う」ところまではみんなが書けるのです。

「思う」のは自由です。でも、そこから先はどうするの？

何度も申して恐縮ですが、私はスポーツにほとんど無縁です。ですから、今更ながらイチローさんのようなアスリートにはなれないでしょうし、そもそもイチローさんを引き合いに出すこと自体が分不相応でけしからんと言われれば反論できません。

それに、決して人々が見ないところでイチローさんがどのような努力をしているか、その努力の内容はアスリートを目指さない限りそのまま真似すらできません。
それでも、例えば、彼が毎日必ずしているというストレッチの一部分くらいなら真似をすることが出来れば、その行為はそのまま自分の健康維持のための一役になるでしょうが、その内容自体をただ真似るのではもったいなさ過ぎるような気がしてなりません。

むしろ、毎日少しずつ努力しつづけることが出来るという精神ステージに立つ手前の段階から、なにがしかのことを「しつづける」こと自体がものすごいことだと思うのです。

偉人伝や素晴らしい結果を出した人の伝記や報道記事などのおよそ８割から９割は、現れた結果について書かれているに過ぎません。そして、ほとんどの人は、その結果を見知って「尊敬する」とか「憧れる」とか、あるいは、「すごい人だ」と評価していることが多い。

そのずっとずっと手前の周囲の人々が目にしない段階の、その人の臥薪嘗胆したであろう下積み時代のステージにまで思いを馳せ、自分なりの目標を立てて、あえて臥薪嘗胆のステージに立ち「行動する」というステージに立とうとする人は少ないし、自分が目標とするステージを目指して行動しつづけられる人となるともっと少なくなる。

別に大げさなことをする必要はないのです。壮大な目標を立てて今日から始めるのだと騒いでいるのは、大風呂敷を広げているだけです。

目標に向かってステージをアップさせようと心に誓った人ほど、密かに始めて密かに努力しつづける。

この「密かさ」の向こうこそが「尊敬の先」の世界ではないかと思った塾長です。

自由ってナンだろう

2023年01月31日(火) アメーバブログ

ジョージ・ガーシュウィン（1910－1949）
アメリカの作曲家。代表作に『ポーギーとベス』『ラプソディ・イン・ブルー』・『スワニー』・『サマー・タイム』・『アイ・ガット・リズム』などがある。

あなたは例えば、ブログや日記を書かれるとき、あるいは、何かの文書を作成するとき、題名（タイトル）をどのように決められていますか。

実はワタシ、題名を与えらたら書けません。全く書けなくなるわけではないと思うのですが、妙にあざとい文章になるのは必至です。

書いた矢先に歯が浮いてくるとか、読んで下さる方が読んだ瞬間に歯が浮いてきそうになるとか、そこまでひどくはないとは思いますが、たまに題名を先に決めて書き始めることがあるのですけれど、そういうときに限って頓挫させてしまいます。８割か９割の確率で途中で発想が出て来なくなり、放り出してしまうのです。しかも、一度放り出してしまったら、戻ってきて書き継ぐことはほとんどありません。捨てたものは捨てたもの。こういうところは妙にきっぱりとしています。ですから、読書感想文とかはもう大の苦手でした。その代わり、「書きたいことを書きなさい」とか言われると、嬉々として書いていましたね。当時の友人から言わせると、「お前はみんなの逆。」でした。

学校授業というシチュエーションではほとんどはお題を決めらます。そうなると、私のような天の邪鬼（じゃく）にとっては、「お題」は「束縛」になってしまいます。逆に「自由に書け」と言われると、「束縛」から解放されるので、書きたいことが書ける。そういう感覚でした。

ところが、周囲の多くの友人たちにとっては、「自由に書け」といわれたらあまりにも漠然としているからか書けなくなるので、「お題」という方向性を決めてもらう方が、書きやすいと彼らはいうのです。

「お前のアタマは、どないなってんねん？」

これは文章を書くことのみにあらずで、周囲が難しいと嘆いている内容を、わりとサクサクと進めていることが多くて、逆に、周囲が簡単だと言うことに難しいと頭を抱えるのです。

魚の絵を描いて、バックグラウンドの色を塗るときも、色を指定されると塗らなくなり、かといって、自由に塗ってよいと言われたら、「自由に」というのがアタマ中に大きくあぐらをかいて居座り、赤やら紫やら、果ては黒というように、およそ魚からは連想しないような色を塗っていました。

「自由に」というのだから、周囲の子も自分と同じような色を塗っているんだろうと思いながら、自分が塗り終わった後に隣の席や前後の席の子の絵を見て愕然とする自分がいます。

「お前の常識は世間の非常識」

と、小学３年生のときの担任の先生から言われました。

帰宅してオフクロ様や親父様にこのことを言うと、

「そのことで授業の邪魔になってるんか？」

と親父様が尋ねますので、

「授業の邪魔はしたことないよ。自由に塗ってエエでと言われたから、言われたまま塗ってん。それが迷惑や言われても意味分からんし。」

と答える始末です。

実はこの「自由」というのが、本当はとても厄介な存在だということに気づいたのは、35歳近くになってからでした。

当時は学校の音楽の教師でした。なので、どっぷりと音楽に浸かり、東京の大師匠の所に足しげく通っては、ピアノの勉強をしていました。

ガーシュウィンの代表作に『ラプソディ・イン・ブルー』がありますが、この作品に出会ったのはこの頃です。

音大生時代の友人が、「オモロイ曲あるで。」と言って、ワタシに楽譜を見せてくれたのです。実際に演奏すれば20分近くかかる超大曲です。

世に出回るCDでも演奏会でも、大抵はピアノソロとオーケストラとの共演なのですが、友人が持って来たのは共演用の楽譜に編集する手前のピアノソロのみのものでした。

この曲はもともとはピアノソロ用に作られた作品です。というのも、この作品を書き上げた当時のガーシュウィンには、まだオーケストラ曲を作曲できるだけの実力がなかったのです。彼はジャズ畑出身で、兄のアイラ・ガーシュウィンが作詞家として先に世に出ていたのですけれど、その詞に作曲するというのを弟であったジョージ・ガーシュウィンが手がけているというように、コンビで活躍しはじめていました。

当時のワタシは、古典が好きでなかったのです。バッハ・モーツァルト・ベートーヴェンが古典に分類される作曲家ですが、どの作品も、論理ががっしりと構築されているので、自分の思うように勝手な表現が出来ません。

「自分の思うように＝自由」

この図式がアタマの中にある以上、古典の世界ほど狭っ苦しいことはありません。それもあって、ガーシュウィンの作品の自由さがものすごく魅力的に感じたのです。

ガーシュウィンはジャズと交響曲を融合したシンフォニック・ジャズという新しい分野を開拓する先駆けとはなりましたが、残念ながら脳腫瘍で39歳で夭折したのです。でも、彼の想いはその後のハリウッド映画のサウンドトラックの世界へと発展させられることとなり、それはそのままアメリカ音楽を象徴する地位を得ることになります。

代表的なところで申しますと、「スーパーマン」・「スターウォーズ」などのサウンドトラックの世界ですね。

幸い大阪の師匠の許しを得ることが出来たのもあり、『ラプソディ・イン・ブルー』に取りかかることができました。自分のレパートリーとして３年か４年ほど持っていたと思います。ところが、だんだん不自由になって来たのです。古典の論理と規則でがんじがらめの世界を飛び出す意味でガーシュウィンの作品を手がけたのに、弾けば弾くほど、研究が進めば進むほど不自由さを感じたのです。

そのときに出会ったのが、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの『半音階的幻想曲とフーガ』でした。半音の使い方が絶妙で、その半音進行が醸し出す不思議さに魅了されてしまいました。

「先生、『半音階的幻想曲とフーガ』を　次の先生主催の演奏会で弾かせて下さい。」

なんと、1900年代の作品から、1600年代の作品へ一気に戻りました。

「へぇ、どういう風の吹き回し？」

演奏会終了後３年ほどの間はレパートリーとしていましたが、この曲に不自由さを感じるどころか、限りない自由さを感じたのです。
バッハは「音楽の父」といわれる、生粋の古典作品を残した人です。時代が古くなればなるほど、論理性や規則性が強くなる。なのに自由を感じるとは、どういうことなのか？　それが分かったのは40歳近くになったころでした。自分が思っていた自由は、単なる根拠のない自分勝手に由来する無規則の自由。今感じている自由は、厳格な中で限りなく許された自由。ガーシュウィンの自由さは、古典の世界の厳格さをとことん研究した先にあるもの。それを研究していなかったのですから、ガーシュウィンの自由さを前に方向性を失ってしまい、その結果として不自由になったのです。そのことを大阪の師匠にお話ししたら、ニコッと微笑まれました。

「『半音階幻想曲』を弾きたいとあなたが言ってきた瞬間に、ああ、もどってきたな、気づいたなと思ったよ。もうちょっと先かなと思っていたのですが、かなり早かったね。」

最近、ときおりなのですが、ご年配の方から文章の書き方を教えてくれないかというオファーをいただくことがあります。

しかしながら、私は「文章を書くには斯（か）くあるべきだ」などという確固たる信念で書いているわけではありませんし、カッコイイ文章とか、スタイリッシュな文章とか、あるいはビジネスに即した文章とか、いろいろな文章を書けるほどの知識量もありませんし、経験値もありません。おそらく、文章の書き方を年配の人だけでなくて、ある程度の社会的経験を経た人々にまだ教えられないということは、文章を書くという世界が持つ厳格の中の限りない自由さに気づいていないからでしょう。

兄のアイラ・ガーシュウィン（右）と
弟のジョージ・ガーシュウィン（左）

ネタがないのがネタ

2023年02月18日（土）アメーバブログ

どうもワタシの頭は貧乏性に出来ているような気がします。というのは、この日はブログ記事のネタになるようなことが見つからずにいたのです。こういうときは、一旦思考停止をし、割り切って一眠りするか、例によって不作法な乱読に限ります。

午後６時にＺＯＯＭ授業を終えた後、通いの生徒さんもほぼ同時に帰宅の途に着き、その後、８時のＺＯＯＭ授業開始まで、塾舎には私ひとりという、いわゆる開店休業状態に入りました。

何かネタはないものかと、何とはなしに着信メールにあったダイヤモンドオンラインの記事を途中まで読んではやめてしまい、机上の「積ん読」から文字通りの未読の本を引き出しては数ページ読んでやめてしまい、柳田国男氏の『妖怪談義』の「ザシキワラシ」の項を読んだものの、内容はほとんど頭に入らずで･･･。

これは頭脳の思考停止状態だということで、仮眠をむさぼることにしました。

30分くらいの仮眠後、よっこらしょっと姿勢を正し直し、途中でほっぽり出していた『祖国に還る』を再び読み始めると、脳裏覆っていた霧がにわかに晴れるように感じたのですが、このときあることに気づいたのです。

書くネタがなくなったのは本当か？

じゃあ、ネタがないことをネタにすれば良いではないか？

ニンゲンの脳とは斯（か）くのごとき強（したた）かなものかと、それが自分の脳内で起きていることに少しばかり満足しながら逡巡させる。

そこでハタと気づいたのが、ワタシの眠気の正体です。

早いもので、飛瀧（ひろう）神社（那智大社の摂社）と玉置神社に参詣して（２月12日）から明日の日曜日で１週間。年齢を重ねると月日の経つのが早くなる。この実感は年々強くなっています。とはいうものの、月日の経つのが早く感じはしても、それ自体が寿命を縮めるということではないし、その分、若いときよりも処理能力もいくぶんかは速くなり、知識と経験値もそれなりに増えて器用にもなっているから、月日を経る速さを感じることについても、敢えて逆らう必要もなしという、例によって身勝手な理解に帰結させると、とても気が楽になります。

それで、眠気の正体ですが、ひとつは以前に申しましたとおり、何か新しい流れが出来る予兆に乗るための、体力と気力の温存なのですが、どうも文章を考えなくなると眠くなるのではということに気づいたのです。そういう意味では、泳ぐのをやめてしまうと生きていけないらしい回遊魚みたい。

この気づきがこのブログ記事のネタになるという気づきにつながって、この文章を書いています。まことにけしからんことですが、文章を書くきっかけなんて、どこにでも転がっていると安易に思っている自分がいます。

今回の「ネタがないことがネタになる」というのも、その辺りに転がっている何の変哲もない「ネタ」なのです。

で、ワタシの場合は文章を書き始めると睡魔が霧散しはじめて意識が急にクリアな状態になって来ます。その上、時間のない世界に入っていきます。というのは、一旦書き始めて一息つく頃には２時間くらい経っているということなんて、ざらにあるからです。その「文章書きスイッチ」がどこにあるのかは、私自身発見できていませんが、書き始めが決まると、意外にもスラスラと言葉が出て来ます。

品のない言い方をお許し願いますなら、芋づる式に言葉が出てくるのです。これをフォロワーになって下さっている塾長先生がおっしゃるには、「（文章の）一筆書き」なのだそうです。カッコ良すぎます。

一応言葉は選んでいるつもりですが、文筆家ではありませんし、ましてや作家でもありませんから、推敲するようなこともあまりなく、書いてしまえば翌日には何を書いたのか忘れていることの方が多いという無責任っぷりです。

こんな感じで、文章を書き始めると頭の中がクリアになってくるだけでなくて、姿勢が真っ直ぐになってきて、けだるさがなくなるのです。
仕事の内容のほとんどがデスクワークですから、身体そのものの疲労感ではなくて、脳が思考停止をすると身体も気だるくなってきて、それが疲れとして感じているようです。これが読書であったらイイなと思いますが、どうもそうはいかないらしい。読めば読みほど眠気がなくなってどんどん読み進められる人、何時間でも本を読むことが出来る人、こういう人が本当に羨ましいです。

かつてスタッフとして来てくれていた大阪公立（旧大阪市立）大学の文学部の学生さんが言っていたのですが、文章を読んで理解することと、文章を書くことはベンツモノらしいのです。

でも、この文章を書き始めるまで、まるでネットサーフィンをするように、書籍のリアルサーフィンをしていましたが、これって、ふと目的もなく入った書店で本棚から手当たり次第に取り出してはちら読みし、すぐさま本棚に戻す行為を繰り返すのとなんら変わりはないので、書くための情報を集めているというような立派な行動とは、お世辞にも言えないわけです。

むしろ、頭の中に何か降りてくるのをただぼんやりと待っているのも手持ちぶさたといえば印象はよろしくなりそうですが、いわゆる芸がないということです。

ということで、今回は「ネタがないことがネタになる」という一席でございました。

駄文におつき合い下さり、ありがとうございました。

編集後記

「ネタがないのがネタ」というブログ記事を書いてから、「これとおんなじやん」と思ったことは、これでした。

オカンと冷蔵庫の中。

何かの用事で買い物が出来なかったオカンが冷蔵庫を開けて一言。

「なんにもないな～。」

そう言いながらも、おかずの２品か３品をちゃっかりと作り上げ、

「残りモンやけど、　意外と出来るもんやな。」

と、また一言。

さすがは生活の達人。オカンは器用です。

それで、何につながったのかというと、ワタシの頭の中もオカンが開けて見ている冷蔵庫の中とおんなじとちゃうか、ということです。

ネタがないと言いながら結構長ったらしい文章が書けてるし、さらに今日まで引きずるのをイイことに、ちゃっかりとここに書いている。

庫内のいわゆる残り物で器用におかずを作ってしまうオカンと、ネタがないと言いながら幸いにも書けてしまっているワタシとの共通点は何やろなと、このブログをしたためながら考える。

「あ！　なんや、そうやったんか～。」と気づいたのがこれ。

深く考えていない。

決して考えなしではありません。考えなしやったら、おかずを作れませんしね。

別に科学的に分析されたデータがあるわけでもないのですが、庫内の様子をうかがうオカンの頭の中は、

① かとゆうて、今更買いに行くのんめんどくさいしなぁ･･･。この「面倒だ」という感情が５割を占めている？
② おととといと昨日は何作っんやったかなぁ･･･。この「過去の分析」が１割。
③ 今までに積み重ねられた経験値が３割ほど。
④ その他諸々･･･。

これを昨日のワタシに置き換えると、

① ああ～、３つめ書かなアカンな～。でも、今更凝った話題を探すのもめんどくさいしなぁ･･･。
② おととといと昨日はどんなこと書いたんやったかな～。
③ 直近の４日分ほどを読んで何か引っかかるネタはないか考える。
④ その他諸々･･･。

どないエエように判断しようと努力しても、いかに深く考えていないかが手に取るように分かります。

更に、オカンの究極的感覚はこれです。

一食分のおかず代、浮いたわ。

みんなおいしい言うて食べてくれたし、冷蔵庫の中もスッキリしたから、一石二鳥やったな。それに、できあいのモン（店屋物）より体にもエエやん。

そこには経験値に即したコスパ計算があり、家族への健康配慮があり、しかもおいしく仕上げるという高度なスキルがあります。

それに加えてオカンの凄いところは何と言ってもこれですかね。

オカンセンサー。

賞味期限？　消費期限？　それより、オカンセンサー。

「なあなあ、これってまだ食べれる？　いつのんやったっけ？」

というワタシから皿を取り、すんすんと臭いをかいで一言。

「アンタやったら大丈夫やわ。」

大抵のモノを食べてもお腹を壊さない自分の息子の頑強さを信じた上での的確な判断は、デジタル・センサーよりも正確です。なぜなら、そんな精緻を極めるセンサーにもない、経験値というもっと高度なセンサーがあるからです。

わが子を産んで育ててきた連綿たる経験値。

こんなオカンのような感覚で文章を書いていけたら素敵ですね。